

創造性による語形成と特質構造

影 山 太 郎

1. 語形成における生産性と創造性

生成文法の初期に Chomsky は人間言語の無限の生産性を強調したが、Lyons (1977: 549) は更に、生産性に対して創造性を区別している。

- (1) a. 生産性 (productivity) : 当該言語の一般的なシステムに則って、新しい表現を作ること。
- b. 創造性 (creativity) : 当該言語の一般的なシステムによるのではなく (あるいは、一般的規則に反してでも) 比喩などの動機づけによって新しい表現を創り出すこと。

生産性と創造性の区別は、Lyons の説明自体が極めて短いものであり、それ以降の研究でも、Bauer (1983: 63) 以外にほとんど取り上げられたことがない。しかしこれは、特に語形成の研究において有意義な概念であると考えられる。

生産的な語形成を、「右側主要部の規則」などの一般的な形態規則に則った複合や派生とすると、創造的な語形成は、Lyons 自身が挙げる *wet blanket* (座をしらけさせる人)、*pickpocket* (すり) のように、右側主要部の規則によらずに行われる突発的な造語と規定することができるだろう。右側主要部の規則 (Williams 1981) とは、「X+Y」という形の複合語において品詞や意味を決定する主要部は右側の Y であるということであり、従来の形態論研究は、このような *rule-governed* な生産性を中心に進められてきた。しかしながら、語彙には、文と異なる際立った特徴がある。それは語彙化 (*lexicaliza-*

tion) という性質である。統語論の一般法則によって生成される文や句はいちいち辞書に登録されないが、語は辞書に登録されるのが原則であり、それは語が持つ名づけ機能に由来する (影山 1995)。語を名づけとすれば、その作り方には、一般的な規則のほか、一般規則から逸脱した *ad hoc* な方法があっても不思議ではない。

創造的な語形成には様々な種類があるものと想像できる。例えば *head-hunter* (首狩り族) を「人材スカウト係り」の意味に用いたり (Bauer 1983: 63), 逆形成によって *gift-wrapping* から *gift-wrap* という動詞を作ったりすることもその一つだろう。本稿では、創造性による語形成の例として、右側主要部の規則に反して左側の要素が重要な役割を果たすと思われる合成語を取り上げ、特質構造 (Qualia structure) の観点からその仕組みを探ってみる。

2. 複合名詞の特質構造

本論に入る前に、右側主要部の規則にしたがう生産的な複合名詞について説明しておく。この種の複合名詞は、非主要部 (左側) が主要部 (右側) の特質構造のいずれかの役割に何らかの情報を補足することによって解釈される。Johnston & Busa (1996) から例を挙げると、*bread knife* の *bread* は主要部 *knife* が本来的に持つ目的役割 ($\text{cut}(x, y)$) を特定化し、 $\text{cut}(x, \text{BREAD})$ として表示するものと分析できる。

主要部の特質構造に示された情報は、動詞にたとえて言えば項 (argument) にあたる必須の情報である。これは、*dollar buying* (ドル買い) のような動詞由来複合語が主要部動詞の項構造 (あるいは語彙概念構造) に指定された情報をもとに解釈されるのと同じことである。ところが、動詞由来複合語には、*impulse buying* (衝動買い) に見られるように、非主要部が主要部の項ではなく付加詞に相当する場合もある。同じことは *N+N* 型の複合名詞にも見られる。例えば「鯖寿司」においては「鯖」が「寿司」の構成役割を補足し、「箱寿司」においては「箱」が「寿司」の形式役割を表すのに対して、「出

前寿司」の「出前」は提供方法を表す付加詞にすぎない。このような付加詞は、主要部の項構造や特質構造に依存せずに、それ独自の意味機能によって解釈がなされる。しかし、左側要素が必須要素であるにしても付加詞であるにしても、右側が主要部であることには違いない。これらは、主要部である右側の名詞にもともと備わっている特質構造を基盤として、新しい複合概念を規則的に作るのである。

これに対して、創造性によって作られる複合語の場合は、単純に、左側が右側を修飾するとは見なされず、何か別の仕組みが必要となる。

3. 創造性による語形成

以下では、創造的な語形成と思われる事例を7つ取り上げる。これらはいずれも、何らかの「名づけ」の必要性によって、左側要素と右側要素の意味構造が合わさって新しい品詞ないし新しい意味タイプが創り出される現象として分析される。

3.1. pickpocket タイプとイディオム

まず、pickpocket などの外心複合語を考えてみよう。pickpocket というのは “One who steals from or ‘picks’ pockets” (OED) ということであるから、“to pick pockets” という行為の発生がそれに関わる人間を代用するメトニミーと見なすことができる。その行為を実際に行うからこそ、pickpocket と呼べるわけであるから、Pustejovsky (1995) の特質構造の理論では主体役割として表記できる。

(2) “to pick pockets” という行為の発生

↓ その行為を行う動作主に名前を付ける

pickpocket

形式役割 = モノ名詞, 人間 (x)
主体役割 = ()

[x PICK POCKETS]

「すり」という行為を行う人間に名前をつける必要が生じたとき、“to pick pockets”という行為全体を動作主の呼び名として登録するのが最も簡単である。一般に、動作主名詞はその動作を目的役割に持つ場合（典型的には doctor のような職業名）と、主体役割に持つ場合（pedestrian, looker-on のようなその現場での行為者）とがある（Busa 1996, 影山 1999）。「すり」の場合は、その行為を働くことで始めて生じるから、“pick pockets”という行為が主体役割に埋め込まれる。

このように、メトニミーによる創造的語形成を、行為の名前を動作主の呼び名に置き換えるという作業として捉えるなら、(2) のような動的なプロセスを経て新しく特質構造が創造 (create) される現象として形式化できる。

創造的語形成の考え方はイディオムの形成にも当てはめることができる。イディオムは非常に複雑であるから、ここでは考え方を簡単に述べておく。kick the bucket という例で説明すると、この表現は、おそらく「いつか、どこかの誰かがバケツを蹴った」という1つの特定の行為が「その人が死んだ」という結果を代弁する表現となり、一般に定着したものと考えられる。

(3) もとになる句または文：kick the bucket (バケツを蹴る)

↓

メトニミーによる意味の特定化：kick the bucket (死ぬ)

↓

辞書登録：kick the bucket

形式役割 = V ⁺ , event(z)
構成役割 = kick (V, head), the bucket (NP)
主体役割 = [y BECOME [y BE NOT-AT-ALIVE]] _z

辞書登録の第1行目 (kick the bucket) は音声表記であり、その意味は主体役割に記されている。構成役割にはこのイディオムを構成する要素が並べられているが、その中の動詞 (kick) が主要部として指定されている。さらに、形式役割は kick the bucket 全体の「外見」すなわち形態的・統語的範疇を表している。ここでは、kick the bucket を V⁺ (動詞プラス) としている点が重

要である。もし仮に **kick the bucket** を単なる V (動詞) とすると, **kick the bucket** が過去形などに屈折する際に, ***kick-the-bucket-ed** のような誤った形が予測されてしまう。正しくは **kicked the bucket** であるから, 屈折語尾の付き方に関して, **kick** が主要部であることを示しておく必要がある。**kick** が主要部であるということは, **kick the bucket** の内部構造が統語的に見える (visible) ということであるが, このことは, **kick the bucket** が受身化できないということと一見, 矛盾する。この矛盾を解消するために, Nunberg et al. (1994), Jackendoff (1997) などが独自の分析を提示しているが, 本稿の代案は, **kick the bucket** などのイディオムに対して「語⁺」(影山 1993; Kagayama 2000) という形態的な資格を与えることである。この概念を使えば, **kicked the bucket** のように屈折語尾が主要部だけに適用するというのは, **looker-on** の複数形が **lookers-on** になるのと同じこととして扱うことができ, しかも, **kick the bucket** 全体が語としての形態的緊密性を備えているために受身化などの統語的変形を受けない, と説明できるのである。

このように, 右側主要部の語形成原則に従わない **pickpocket** と **kick the bucket** は共に, メトニミーという意味的動機づけによって新しい主体役割が創生されたものと見なすことができる。違いは, **pickpocket** が形態的に 1 語となっているのに対して, **kick the bucket** は形式役割として V⁺ を持ち, 構成役割として VP 構造を保有しているという点である。

3.2. 「回り道」タイプ

日本語の和語複合語は右側主要部の規則に依拠するのが原則である。「読書, 落馬」のように「する」を伴って動詞になる二字漢語の動名詞 (Verbal Noun) は左側に主要部を持つが, これらは語源的に中国語の VO 語順を反映するものとして扱われる。ところが, 和語でありながら, 左側に動詞, 右側に名詞を取り, 全体として動詞的な意味合いを持つ複合語が幾つか存在する (影山 1993: 184)。

- (4) a. 回り道, 寄り道, 摘み草, 入れ墨, 置き手紙, 立て膝, 入れ知恵, 打ち水, 差し水, 突き指, 告げ口, 巻き舌

b. 買い物, 編み物, 洗い物, 書き物, 落とし物, 忘れ物

これらの多くは、「NをVすること」という行為の意味と、「VしたN」のように具体物を指す意味の2つを持つ。例えば、「買い物」というのは、「物を買うこと」という行為を表すことも、「買った物」そのものを表すこともできる。純粋な名詞が通常「～をする」の構文で使えないのに対して、(4)の行為名詞は「～をする」構文に適合する。「悪知恵」は純粋な名詞であるから「*悪知恵をする」と言えないが、「入れ知恵」は「入れ知恵をする」と言うことができる。これらの複合語の形態構造は、一般の和語複合語と同じように右側主要部の規則に従っているように見えるが、意味解釈の点では「左側」が主要部の様相を呈している。その結果、(4)の表現が行為を表す意味の場合は、形態上の主要部(右側)と意味的な主要部(左側の動詞部分)とにズレ(mismatch)が生じることになる。

この形と意味のズレはどのように扱えばよいだろうか。影山(1993: 184)では、「近道をする」のように動詞+名詞でない場合も同じ構文に適合するといったことから、意味拡張という観点から説明を試みた。すなわち、(4)のほとんどは、それぞれの行為に対応する個物の意味があるから、「貼り紙」なら「貼ってある紙」というモノ名詞の意味が基本で、そこから行為の意味が派生したのではないかと考えた。

しかしながら、もし個物の意味が基本なら、(5b)がトートロジーであるのと同じように、(5a)もトートロジーになってしかるべきである。

(5) a. 突き指した指, 買い物した品物, 回り道した道筋

b.*読本の本, *市営バスのバス, *井戸水の水

(5a)は意味的に整合するから、「買い物」などは元々が行為を表す名詞(影山(1993)で言う「単純事象名詞」)であり、そこからモノ名詞の意味が派生したという意味変化のほうが適切ではないかと考えられる。実際、「入金」のような漢語の場合にも、「代金を受け取ること」という行為の意味から、「そのようにして受け取ったお金」という具体物への拡張が見られる。

では、(4)の表現がもともと行為を表すとすると、なぜ、右側主要部の規

則に反して、動詞要素が左側にくるのだろうか。これらは、モノ名詞の前に動詞を置くことによって、行為の意味の発生が動機づけられ、新しく行為名詞が作られたものと見なすことができる。pickpocket の場合は行為が動作主の名前となるのに対して、(4) の複合語では、逆に、名詞が元にあって、その前に動詞を付けることで行為の意味が助長される。どちらの場合も、行為を表す動詞要素が主体役割を提供することによって、新しい単語が創造されるという点で共通している。

(6) 摘み → 草

$$\left[\begin{array}{l} \text{形式役割} = \text{単純事象名詞, event}(z) \\ \text{主体役割} = (\quad) \end{array} \right]$$

メトニミーによる主体役割の創生 \uparrow $[\text{Event} \times \text{PICK PLANT}]_z$

以上をまとめると、「動詞+名詞」の複合名詞が行為を表すのは、モノ名詞から単純事象名詞に意味タイプが変更されたからであり、その変更を動機づけるのが、修飾部にくる動詞要素である。すなわち、その動詞の語彙概念構造を主要部名詞の主体役割に組み込むことによって、個物から行為への意味タイプの変更がもたらされる。

3.3. 「太っ腹」タイプ

前節で取り上げた「回り道」タイプは、前要素が動詞であるために、複合語全体が行為を表すが、それに準じる形態として、「太っ腹」のように名詞の前に形容詞がつく例がある(影山 1990)。

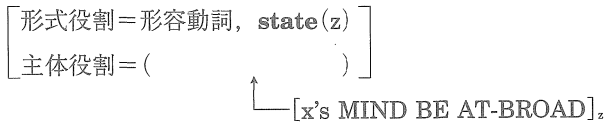
- (7) a. 太っ腹な, 大柄な, 弱気な, 短気な, 冷血な, 悪質な, 短命な,
悪趣味な, 多情な, 多才な
- b. 長髪の, 大口の, 弱腰の, 良質の, 美声の

(7a) は形容動詞である。(7b) は「-な」屈折は示さないものの、それに近い形容詞的性質を持っている。ここで重要なのは、これらの複合語の右側要素だけでは純粋な名詞である(「*腹な, *柄な」とは言えない)のに、前に「太, 大」などの形容詞要素を付けると、全体として形容詞に近い性質を帯びるようになるということである。ここでも、左側にくる形容詞要素が創造的語

形成を司っている。

(7) の複合語全体が形容詞的な性質を帯びるのは、前要素が形容詞ないしそれに類する表現だからである。しかし、だからと言って、左側の形容詞を複合語の主要部と見なすのは適切ではない。なぜなら、「太い」はイ屈折の形容詞であるのに、「太っ腹」はイ屈折にならないからである。形容詞は状態を表すものであるから、その状態性が後ろの名詞と合わさって形容動詞（影山（1993）の用語では「形容名詞」）になると考えるのが妥当だろう。ただし、形容詞と名詞が単純に合わさるのではなく、「太っ腹」なら「腹が太い（つまり、度量が大きい、心が広い）」、「美声」なら「声が美しい」というネクサス関係（主述関係）が読みとれることが重要である。このネクサス関係が成立することによって、新しい主体役割を構築することが可能になる。

(8) 太っ → 腹



この考えを用いれば、これまで日本語形態論で例外視されてきた、「無」「不」「未」といった接頭辞が品詞を変えることがある（野村 1973, Kageyama 1982）という現象も同じように創造的語形成として扱うことができる。例えば、「気力」は名詞であり、「*気力な」と言えないが、「無」を付けると「無気力な」という形容動詞になる。「合理(*な)」と「不合理(な)」, 「完成(する)」と「未完成(な)」なども同じ性質である。「無」「不」「未」そのものは接頭辞であり、形容詞という品詞ではないが、しかしそれらの意味の性質上、「～がない状態」あるいは「まだ～が行われていない状態」という状態性の解釈を付加する。このように付加された状態性の意味がきっかけとなって、品詞の変更がもたらされる。

3.4. 「深酒」タイプ

前2節では、名詞の前に動詞または形容詞が付くことによって、行為または状態の意味が生まれ、モノ名詞が単純事象名詞ないし形容動詞に変更される

ことを見た。動詞または形容詞は、述語であるから、それらの意味構造（語彙概念構造）をそのまま主体役割に組み込んで新しいデキゴト名詞を創り出すことはそれほど困難ではない。

しかし、行為としての解釈を動機づけるのは動詞だけではない。動詞と密接に関わる副詞も、デキゴト名詞を創造するきっかけを提供する可能性がある。前要素が副詞的な解釈を持つ複合名詞を探してみると、前要素が動詞である例と比べると数が少ないものの、次のような例が見つかる。

(9) 深酒, 早弁, 深爪, 早昼, 近道

これらは、「～をする」という構文（影山 1993）に適合するから単純事象名詞と見なされる。

(10) a. *酒をする。*爪をする。

b. 深酒をする。深爪をする。

これらの例では、「深く」すなわち「度を過ぎて」という副詞的要素が「酒を飲む」「爪を切る」という行為の意味を誘発している。

(11) 深酒

形式役割 = 単純事象名詞, event(z)
主体役割 = [x DRINK ALCOHOL HEAVILY] _z

「酒」というモノが「深酒」ではデキゴトの意味が変わることは、(12 b) のような表現が不適格であることから分かる。

(12) a. 灘の酒を飲む。温かい弁当を食べる。

b. *灘の深酒を飲む。*温かい早弁を食べる。

「深酒」の類が行為を表すのに対して、状態を表す例もある。

(13) 早耳, 半ドア

これらが個物ではなく状態を指すことは、次のような表現で示される。

(14) a. 彼の早耳は {有名だ / *赤く腫れている}。

b. 半ドアは {危険だ / *スチール製だ}。

「耳」は「音や声を聞くため」、「ドア」は「外部と内部を遮断するため」といった目的役割を持っているが、それを手がかりにして、「早耳」なら「うわさ

を聞きつけるのが早いという性質, 「半ドア」なら「車のドアの遮断機能がきちんと働いていない (閉まり方が半端である) という状態」を意味する状態名詞となる。

3. 5. fast food タイプ

「早弁」ないし「早昼」に対する英語は *an early lunch* で, 「通常より早く食べる昼食, あるいは, 通常より早く昼食を食べること」という意味になるが, 英語の *lunch* は単独でも, モノ名詞とデキゴト名詞の両方の意味があるから, *early* の付加がタイプの変更をもたらすわけではない。このことは, *fast food* を見れば明瞭になる。*fast food* は「すばやく調理して提供できる食べ物」というモノ名詞の意味しかないが, それは *food* 自体がモノ名詞だからに他ならない。

fast food や *fast typist* の *fast* が主要部名詞の特質構造の内部を修飾することを説明するのに, Pustejovsky (1995) は選択束縛 (*selective binding*) と呼ばれる意味解釈規則を提案している。しかしながら, ここで注意したいのは, このような特別な解釈は「形容詞+名詞」という連鎖に限られるということである。つまり, 叙述用法では, この種の副詞的解釈は成り立たない。

- (15) a. *fast food* ≠ *The food is fast.*
 b. *heavy smoker* ≠ *The smoker is heavy.*
 c. *hard worker* ≠ *The worker is hard.*

選択束縛による分析は, *fast food* などの形態的資格についても問題を引き起こす。Pustejovsky は, これらを単に形容詞+名詞の名詞句と見なすが, 実際には, これらは複合語を形成している。

- (16) a. *the unappetizing fast food*, **the fast unappetizing food*
 b. *a Japanese hard worker*, **a hard Japanese worker*

hard worker が複合語とすれば, 「一生懸命勉強する学生」を **hard student* と言わないことは語彙的な空白として説明できるが, 選択束縛というような解釈規則を使うと, なぜ *hard worker* がよくて **hard student* が不適格なのかを説明するのは極めて困難である。

なお, hard worker は harder worker のように比較級にすることもできるが, 前述の「語⁺」という概念を使えば, これは問題ではない。通常の語 (word) はその内部に比較級などの屈折語尾を許さないが, 語⁺ではそれが許される。

まとめると, Pustejovsky (1995) の選択束縛は, 創造的語形成に準じる現象として捉えることができる。「準じる」と言ったのは, 英語の fast food は, 日本語の「深酒」と似てはいるものの, 創造的語形成の特徴である品詞や意味タイプの変更を伴わないからである。

3.6. 「小耳にはさむ」タイプ

先に述べた「早弁, 半ドア」はそれだけで単語として機能するが, 同じような形で複合語の体裁をとっていても, (17) のような慣用句は多少事情が異なっている。

(17) 小手をかざす, うわさを小耳にはさむ, カバンを小脇に抱える, 小腰
をかかめる, 小腹がすく, 小首をかしげる

これらの例では, 「小」は形態上はその後の身体部分名詞と一緒にになって複合語を作っているが, 意味解釈上は, 単にそれらの身体部分を修飾するのではない。「小手」は「小さな手」という意味ではない。これらの慣用句における「小」の働きは, 次につづく「名詞+動詞」全体を修飾して, 「軽く/ちょっとその動作をする」という意味を表すことである。このように, (17) では形態と意味が大きくズレている。

この特異性を説明するために, Kitagawa (1986) は, 生成統語論の論理形式 (Logical Form; LF) において, 「小」の部分だけが複合語から切り離され, 動詞句 (VP) に付加されるという分析を提案している。

(18) 統語構造: [_{VP} [小耳]_N に はさむ]

→論理形式: [_{VP} [小] [_{VP} [_t 耳]_N に はさむ]]



接辞繰り上げ

繰り上げられた「小」は「耳にはさむ」全体を修飾し, 「軽く/ちょっと, 耳

にはさむ」という解釈が得られるというわけである。

しかしながら、(18)の分析は形態論の根幹に関わる重要な問題をはらんでいる。その1つは、語の「形態的緊密性」(Di Sciullo and Williams 1987, 影山 1993)という性質である。一般に、語は統語的に分離不可能なまとまりを形成していて、その一部分を統語的な操作によって切り離すことは許されない。LFが統語的なレベルであり、そこでの接辞移動も統語的な操作であるとすれば、語の「形態的緊密性」に違反する(18)の分析は受け入れられないことになる。

上で指摘した問題は(18)の後半部分に関わるが、それより更に大きな問題が(18)の前半部分に指摘できる。Kitagawaは、統語構造において「小耳」だけが複合語であり、「小耳にはさむ」は動詞句であると見なしているが、実際のところは、「小耳にはさむ」全体が緊密な形態的まとまりを形成しているようである。

(19) a. 右の手をかざす。怪我をした手をかざす。

b. *右の小手をかざす。*怪我をした小手をかざす。

(20) a. 変なうわさを小耳にはさんだ。

b. *小耳に変なうわさをはさんだ。

(21) a. 首相の発言には小首をかしげざるを得ない。

b. *小首を、首相の発言にはかしげざるを得ない。

このように、「手をかざす」だけでは通常の句であるが、「小」を付けることで「小手をかざす」全体が形態的緊密性を持つようになる。言い換えると、「小」を付けることによって、句が語に変わるということである。

(22) $\left[\begin{array}{l} \text{形式役割} = V, \text{ event}(z) \\ \text{構成役割} = \text{小脇に, 抱え-} \\ \text{主体役割} = [x \text{ HOLD } y \text{ UNDER } x\text{'s ARM LIGHTLY}]_z \end{array} \right]$

↑

「脇に抱える」+「小」の語彙概念構造

これまでと同じように、主体役割が基盤となって、出来事を表す形式役割が生

まれ、「小手をかざす」全体がV（あるいはV⁺）になる。

3.7. 「お手」タイプ

創造的語形成の最後の例として、接頭辞「お」に触れておく。

- (23) a. 犬が {お手/*手} をする
 b. 園児は {お絵描き/絵描き} がすきだ。(意味が異なる)
 c. 上役に {お中元/*中元} をする。(cf. 中元セール)
 d. そろそろ, {お茶/*茶} にしましょう。

接頭辞「お」の性質は不明な部分が多いが、大きく分けて2つの働きが認められる。1つは、「お聞きになる」のように主語に対する尊敬語としての働き、もう1つは「おトイレ」のような美化語としての働きである。このうち、尊敬語としての「お」が含意する「主語の行為」という意味合いが(23)の表現を動機づけていると推測される。「お手」の場合なら、「お」を付けることによって、「犬が前足の一方を持ち上げる」という動作が主体役割として強制的に組み込まれて、デキゴト名詞が創造される。

これに対して、美化語の働きの「お」は典型的にモノ名詞に付加される。この働きを利用すれば、上とは逆に、デキゴト名詞からモノ名詞への組み替えを起すことができる。

- (24) お手伝い(さん), おのぼり(さん)/おにぎり, おつまみ, お守り, おはじき, お供え, おかわり (影山 1999: 113)

この場合の「お」は、デキゴト名詞が主体役割に持つ意味表示（語彙概念構造の表示）において、そこに関わる動作主ないし対象物を抽出し、それをモノ名詞として形式役割に据える働きをする。

4. ま と め

本稿では、これまで軽視ないし無視されてきた「創造性による語形成」に該当すると思われる例をいくつか取り上げた。これらは、何らかの方法で主体役割を導入することによって新しい形式役割（品詞ないし意味タイプ）を創り出

すという、特質構造の組み替え操作によって分析できる。

参照文献

- Bauer, Laurie. 1983. *English word-formation*. Cambridge University Press.
- Busa, Federica. 1996. *Compositionality and the semantics of nominals*. Ph.D. dissertation, Brandeis University.
- Di Sciullo, Anna-Maria and Edwin Williams. 1987. *On the definition of word*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1997. *The architecture of the language faculty*. MIT Press.
- Johnston, Michael and Federica Busa. 1996. The compositional interpretation of nominal compounds. Ms. Brandeis University.
- Kageyama, Taro. 1982. Word formation in Japanese. *Lingua* 57: 215-258.
- 影山太郎. 1990. 「日本語と英語の語彙の対照」玉村文郎(編)『講座日本語と日本語教育第7巻:日本語の語彙と意味』1-26. 明治書院.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎. 1995. 「文と単語」『日本語学』第14巻第5号:12-20.
- 影山太郎. 1999. 『形態論と意味』くろしお出版.
- Kageyama, Taro. 2000. Word plus: The intersection of words and phrases. In Jeroen van de Weijer and Tetsuo Nishihara, eds., *Issues in Japanese phonology and morphology*. Mouton de Gruyter. (印刷中)
- Kitagawa, Yoshihisa. 1986. More on bracketing paradoxes. *Linguistic Inquiry* 17: 177-183.
- Lyons, John. 1977. *Semantics*. 2 vols. Cambridge University Press.
- 野村雅昭. 1973. 「否定の接頭語『無・不・未・非』の用法」『ことばの研究4』31-50. 国立国語研究所.
- Nunberg, Geoffrey, Ivan Sag, and Thomas Wasow. 1994. Idioms. *Language* 70: 491-538.
- Pustejovsky, James. 1995. *The generative lexicon*. MIT Press.
- Williams, Edwin. 1981. On the notions "lexically related" and "head of a word." *Linguistic Inquiry* 12: 245-274.